父親と家族
── 夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス，幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達 ──

Father and the family: Exploring links between husband－wife relation, wife's mental stress, infant's social adaptability and husband's own personality development.

尾形　和男・宮下　一博

Kazuo OGATA and Kazuhiro MIYASHITA

問題と目的

家族システム論では，家族は父親，母親，子どもを中心とする家族成員の相互の影響に基づいて変化していくと考えられる。これは，子どもの成長発達に母親または父親が直接的な影響力を持つという従来の固定的観念に対する新しい考え方である。

従来，子どもの適応・発達に関しては母子関係の中で捉えられていたが，母子関係に傾倒しすぎるという反省から，Lamb（1975）は父子間に形成される愛着関係を取り上げ，家族内における父親の役割を強調した。その後，Clarke-Stewart（1978）は父親の，母親や子どもに対する影響を指摘し，家族内における父親の役割を強調した。

家族システムとは，夫婦，親子，同胞などのサブシステム相互の関係によって成り立ち，全体として１つのまとまりを持つ有機的なシステムとされている（Minuchin, 1974）。

これまでの家族システムに関連する研究は，①家庭における父親（夫）の役割に焦点を当てて，母親（妻）や子どもの発達や適応との関連を検討したもの，②夫婦（父母）関係のあり方と子どもの発達や適応との関連を検討したもの，③父親・母親（夫婦）の子育てへの関わりと親自身の成長発達との関連を検討したもの，④家族機能に焦点を当て，子どもの発達や適応との関連を検討したもの，に大別される。以下に，順次これらを紹介しよう。

まず，①の家庭における父親（夫）の役割に焦点を当てて，母親（妻）や子どもの発達や適応との関連を検討した主な研究を取り上げると，母親が父親の情緒的援助を受け，受容されていると認知するほど，母子関係が良好であり，子どもの発達も良好であるという結果（Crokenberg, 1981; Weiraub & Wolf, 1983）が報告されている。また，父親が葛藤，否認，引きこもりなどの否定的な態度で母親に接し，そのことに対して母親が苦痛を抱く場合には，子どもの向社会的行動と情動的関心が少なくなるとの報告（Lindahl, Howes & Markman, 1988）や，幼児の子育て中の家庭では，父親が直接子育てに関わる場合に母親の育児参与度が高く，子どもの精神発達が良好であることが報告されている（尾形, 1993）。さらに，牧野・中西（1985）は，乳幼児の子育てをしている416組の夫婦を対象とした研究から，妻が何らかの仕事を持っている夫婦については，夫がそうした妻に理解を示し，かつ夫の育児分担と参加について妻が好意的に受けとめている場合に，妻のストレスが低くなること，諏訪・戸田・堀内・田丸・角本（1997）は，１歳児の養育に当たっている母親1,568人を対象とする研究から，妻が夫から理解されていると認知するほど育児ストレスが軽減することを報告している。同様に，原・江崎・弦巻・石橋・田嶋（1998）は，430組の夫婦を対象として，夫が子どもとコミュニケーションをとり，子育てに積極的に参加しているほど，妻の精神的負担が減少するという結果を見出している。また，岡本（1996）は育児期における母親のアイデンティティに関し，女性として，母親として統合を遂げるための重要な要因は，夫が家事・育児に対して実際に協力するということではなく，夫が妻の生き方を理解し，心理的に支えていくことである，との指摘を行っている。

このように，これまでの研究では，父親の家庭における協力や母親に対する適切な関わりが，母親や子どもの

健全な発達・適応と関係することが多く指摘されている。しかし，育児は母親が中心になって行うものであるという意識を強く持つ母親に関しては，父親の育児に対する協力度が高いほど育児不安が高いという結果（越・坪田, 1990）が報告されており，必ずしも一致した結果が得られているとはいえない面がある。

次に，②の夫婦関係のあり方と，子どもの発達や適応との関連を検討した主な研究を紹介すると，まず，夫婦関係の調和が母子の愛着関係を促進するという結果（大日向, 1988; Nakagawa, Teti & Lamb, 1992）や，子どもの健全な愛着の発達のためには夫婦関係の調和が必要であるという結果（数井・無藤・園田, 1996; Belsky, 1984; Belsky & Isabella, 1988; Goldberg & Easterbrooks, 1984; Howes & Markman, 1989）が報告されている。また，Deal, Halverson & Wampler (1989) は，幼児の子育ての方針について夫婦間の一致度が高い場合，家庭環境が良好であり，子どもの社会適応も良好であるという結果を得ている。尾形（1995）も，就学前児童の子育ての方針について，夫婦間の一致度が高いほど，子どもの社会生活能力が良好であるという結果を見出している。さらに，日常のストレスに対する9～10歳の子どもの対処能力に関して，夫婦間の関係が良好な家庭の子どもはそうでない子どもと比較して攻撃的な対処行動をあまり取らないことが指摘されている（Hardy, Power & Jaedicke, 1993)。一方，夫婦関係の良好性は育児行動の良好性と関連しているが（新谷, 1999），夫婦間の敵意や葛藤は威圧的な育児行動と関連し（de Brock & Vermust, 1991），母子関係に悪影響を与えたり（Christensen & Margolin, 1988; Engfer, 1988; Rutter, 1988），子どもの問題行動と関係し（Katz & Gottman, 1993），さらに，両親の愛情関係が家庭の雰囲気を媒介として，9歳～11歳の子どもの抑うつ傾向と関係する（菅原・八木下・詫摩・小泉・菅原, 1998）ことが指摘されている。

これら一連の報告は，良好な夫婦関係が子どもの発達や適応にとって重要であることを示唆している。しかし，夫婦関係が良好でない場合に，逆に母親の子どもに対する関わりが促進され，子どもに良い結果をもたらすとする報告（Engfer, 1988）もあり，ここでも一貫した結果は得られていない。

また，③の父親・母親の子どもとの関わりと親自身の成長発達との関連を検討した研究に関しては，柏木(1993)によれば，最近米国の家族社会学者（Robinson & Barret, 1986; Bronstein & Cowan, 1988）を中心に始められているものの，わが国ではまだ研究数自体少ない，という現状がある。諸外国の主な心理学的研究としては，父親となり，養育を行うことは父親の自己確立の発達に重要な意味を持ち（Hawkins, Christiansen, Sargent & Hill, 1995），また，父親の自己理解，他者への共感能力，感情統合能力などの面で発達が見られる（Heath & Heath, 1991）とする指摘がある。我が国における主な研究を紹介すると，牧野・中原（1990），山口（1993）は，子育てに関わることで，父親自身が成長することを報告している。同様に，新谷・村松・牧野（1993）は，子育てに多く関わった父親ほど親としての意識が高まり，人間として成熟したと考える傾向があることを指摘している。また，柏木・若松（1994）は家族システムの枠の中で，子どもの大人に対して持つ意味を基本に位置づけ，大人の人格的発達の側面から研究を行い，成人期の男性は結婚を契機とし，子どもの誕生とともに子育てに関わることによって，人間としての成長を遂げることを指摘している。これらは，子育てへの関わりが成人の健全な心理的成長と関係することを一貫して示している。

最後に，④の家族のあり方との関連で家族成員の発達・適応について検討した研究に関しては，最近になりようやく注目されてきており，研究の数そのものは少ないが，家族成員の自我同一性の発達に関する報告がなされている。例えば，渡辺（1989）は，青年期の自我同一性と家族機能との関わりについて大学学部学生と大学院学生307名を対象に検討している。その結果，同一性達成と表現性，民主的家族形態，知的文化的態度，活動的レクリェーションの態度，宗教の強調，家族社交性の各機能に正の有意な相関が，外的統制位置と遊離性との間には負の有意な相関がみられた。また，同一性拡散については，遊離性，放任的家族形態と正の有意な相関がみられ，結合性，表現性，知的文化的態度，宗教の強調，民主的家族形態との間には負の有意な相関がみられた。Jackson, Dunham & Kidwell (1990) は，家族凝集性，家族適応度などが青年の自我同一性探求にどのような影響力を持つのか検討した。その結果，男性は自我同一性探求が高い者ほど，自己の家族の適応度が高いと認知しているが，女性では自我同一性探求が高い場合には家族の適応度が高いと認知しているグループと低いと認知しているグループの双方に分かれた。また，Willemesen & Waterman (1991) は家族機能と同一性スティタスとの関連性について検討し，同一性拡散は結合性の欠如している家族の男女に多くみられることを指摘している。一方，藤森・真栄

城・八木下・菅原（1998）は，前思春期の子どもの精神的健康と両親の認知する家族システムの機能状態との関連について分析を加えている。そして，家族凝集性機能の低い家族の子どもの抑うつ傾向が高いという結果が得られ，家族凝集性・柔軟性機能は家族全体の雰囲気の形成に関与し，これを通じて子どもの精神的健康に影響を与えることを指摘している。また，高橋（1998）は，両親間の関係と家族成員である中学生の精神的健康との関連性について調査に基づき分析している。それによれば，両親間の関係（愛情）の良さが，子どもの精神的健康の良さを規定する傾向にあることが示されている。

以上のように，家族システムに関する研究は，近年増加しつつあるとはいえ，まだ少ないというのが現状である。そして，これまでの研究では，上記①～③のいずれかに焦点を当てた研究が多く，家族システム論にそもそも内包されている，親（特に父親）に中心を置きつつ，家族相互作用という視点から家族成員への影響を扱った研究は，ほとんどなされていない。

本研究では，上記の①～③の全てを取り上げた研究を行う（なお，④については本報に続く研究で検討を行う予定である）。すなわち，家庭内における父親の役割に焦点を当て，それが母親や子どもに与える影響を検討するとともに，そのことによる父親自身の成長発達について検討を加える。核家族化が進行し，夫婦共働き家庭が増加しつつある現在，家庭における父親のあり方に焦点を当てていくことは現代的な意義が大きいと思われる。また，家庭における父親不在が叫ばれて久しいが，そのような現代において，父親という観点から家族のあり方を捉え直すことは重要なことであろう。なお，上記②の研究については，父親の家庭での協力と，それが母親に与える影響という視点から父母の類型化を行うことにより，夫婦関係が子どもの発達に与える影響という点について検討を加えることにする。尾形・宮下（1999）では，小学校低学年の子どもを持つ父母を対象として検討したが，本研究では，まだ子育てにかなり時間や労力を要する幼児期の子どもを持つ父母を対象として研究を進めたいと思う。

本研究の目的は，以下の3点である。

(1) 父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスとの関連について検討する。

(2) 父親の家庭での協力，母親の精神的ストレスに基づいて父母の類型化を行い，子どもの社会性の発達に差異がみられるか否か検討する。

(3) 父親の家庭での協力と父親自身の成長発達との関連について検討する。

方　法

(1) 調査対象

群馬県内に在住の幼稚園児とその夫婦162組［平均年齢は，父親35.7歳，母親33.2歳。共働き家庭（パートを含む）33，専業主婦家庭114，その他・不明15。子どもは，3歳21名，4歳52名，5歳67名，6歳22名］。

(2) 質問紙

以下の5種類の質問紙（検査）を使用した。

①父親の家庭での協力を測定する質問紙（13項目。尾形，1993等による。4段階評定）。②特性不安を測定する質問紙（10項目。清水・今栄，1981の「特性不安尺度」より10項目を選択。4段階評定）。③母親の精神的ストレスを測定する質問紙（31項目。田中，1995による。5段階評定）。④子どもの社会性の発達状況を測定する質問紙（S－M社会生活能力検査，日本文化科学社）。⑤父親の成長発達を測定する質問紙（49項目。柏木・若松，1994による。4段階評定）。このうち，①と⑤を父親用，それ以外を母親用としてそれぞれ冊子を作成した。

(3) 調査時期及び実施法

1996年11月～12月に父親用，母親用の質問紙を1セットにして幼稚園で母親に配布した。そして，両親が回答後，封をして（無記名）子どもに持たせ担任に提出してもらった。

なお，片親家庭の場合には，一方の親用の冊子のみ同封し，同様に回収したが，これについては分析段階で除外した。

結　果

質問紙②は，質問紙①と③との関連を検討する上で，予め特性不安の高い母親（のサンプル）を除外するために設定したものである。質問紙②の各項目（表1参照）に，得点が高いほど不安が高くなるように4～1点を付

表1　特性不安を測定する項目

1．すぐに決心がつかず迷いやすい。
2．困難なことが重なると圧倒されてしまう。
3．たいしたこともないことが気になってしょうがない。
4．物事を難しく考える傾向がある。
5．自信が欠如している。
6．やっかいなことは避けて通ろうとする。
7．憂うつである。
8．ささいなことに思いなやむ。
9．ひどくがっかりした時には気分転換ができない。
10．物事に動揺しないほうである。

与し総得点を算出した。そして，この総得点が30点以上の9名を除外し，153組を以下の分析の対象とした。

1．質問紙の構造化

(1)　父親の家庭での協力を測定する質問紙

質問紙①の各項目に4～1点の得点を与え，主因子解による因子分析を実施した。固有値1.0以上の2因子を抽出し，これに*Varimax*回転を施した。1つの因子にのみ.40以上の負荷を有することを条件に項目の選択を行った。その結果を整理したものが表2である。第1因子は「子どもといろいろと話をする」，「子どもの世話やしつけをする」，「夫婦でいろいろと話をする」などの項目の負荷が高く「子ども・妻とのコミュニケーション」と命名した。第2因子は「食事の後かたづけ（食器洗いなど）をする」，「家の掃除（整理整頓を含む）をする」，「洗濯の手伝いをする」などの項目への負荷が高く「家事への援助」と命名した。

表2　父親の家庭での協力を尋ねる項目の因子分析の結果の概要

項目	F1	F2	共通性	α
13．子どもといろいろと話をする。	.764	.130	.600	.869
1．子どもの世話やしつけをする。	.711	.258	.572	
10．夫婦でいろいろと話をする。	.704	.125	.511	
11．休みの日に子どもと一緒に遊ぶ。	.686	.180	.548	
9．妻が子育てや家事のことで悩み事を話したとき相談にのる。	.650	.167	.503	
8．子育ての方針について夫婦で話し合う。	.643	.191	.650	
12．子どもの勉強などの相談にのる。	.622	.195	.450	
5．食料品や日常品の買い物に妻と一緒に行く。	.467	.227	.270	
3．食事の後かたづけ（食器洗いなど）をする。	.041	.879	.774	.748
4．家の掃除（整理整頓を含む）をする。	.264	.690	.546	
7．洗濯の手伝いをする。	.150	.565	.342	
6．食事を作るのを手伝う。	.178	.434	.220	
寄与率（%）	30.18	17.01	累積寄与率(47.19)	

この結果に基づいて，以下，2つの下位尺度得点を算出した。なお，これら2つの下位尺度のα係数は順に.869と.748であり十分な信頼性を有していると判断した。

(2) 母親の精神的ストレスを測定する質問紙

質問紙③の各項目に５～１点を与え，因子分析（主因子解）を行い，固有値1.5以上の４因子を抽出した。これに*Varimax*回転を施し，１つの因子にのみ絶対値.40以上の負荷を有することを条件に項目選択を行った（表３参照）。それにより，第１因子は「朝気分がすぐれない」，「食欲がない」，「毎日の疲れがとれない」，「頭が重い」などの項目の負荷量が高く「心的疲労感」，第２因子は「物事に集中できない」，「何となくイライラする」，「何事も面倒くさい」などの項目の負荷量が高く「集中力の欠如」，第３因子は「自分はひとりぼっちだと感じる」，「さみしさを感じる」，「家族から無視されている」などの項目の負荷量が高く「孤立感」，第４因子は「心配ごとがある」，「思い悩んでいる」，「将来が心配である」，また「開放感を感じる」，「はつらつとした気分である」（いずれも負の負荷）などの項目の負荷量が高く「自己閉塞感」とそれぞれ命名した。

表３　母親の精神的ストレスを測定する項目の因子分析の結果の概要

項　　目	F１	F２	F３	F４	共通性	α
15. 朝気分がすぐれない。	.748	.135	.150	.160	.626	
16. 食欲がない。	.735	.013	.278	.041	.620	
12. 毎日の疲れがとれない。	.621	.134	－.058	.028	.408	
17. 頭が重い。	.620	.192	.134	.117	.453	.828
13. 疲れて考えられない。	.551	.251	.184	.100	.410	
14. 胃腸の調子が悪い。	.513	.195	.076	－.014	.308	
18. よく眠れない。	.484	.040	.232	.209	.333	
４．物事に集中できない。	.165	.692	.227	－.025	.558	
６．なんとなくイライラする。	.241	.662	.088	.079	.510	
７．何事も面倒くさい。	.179	.644	.037	.069	.452	
３．気力がない。	.143	.630	.172	－.035	.448	.826
27. 自信がもてない。	.180	.528	.220	.364	.492	
10. 憂うつな気分である	.320	.520	.142	.326	.499	
２．すぐ怒り出す。	－.028	.460	.075	.141	.238	
22. 自分はひとりぼっちだと感じる。	.036	.214	.792	.075	.680	
23. さみしさを感じる。	.127	.167	.687	.262	.585	
24. 家族から無視されている。	.230	.076	.598	.113	.423	.797
25. 生活に圧迫感がある。	.308	.152	.510	.220	.426	
21. 毎日が退屈である。	.263	.359	.480	.145	.450	
８．心配ごとがある。	.145	.320	.028	.694	.606	
19. 思い悩んでいる。	.343	.189	.260	.564	.539	
９．将来が心配である。	.308	.239	.001	.541	.445	.749
30. 開放感を感じる。	－.055	.143	－.204	－.532	.348	
29. はつらつとした気分である。	－.133	－.120	－.256	－.409	.265	
寄与率（%）	13.73	13.14	13.11	12.69	累積寄与率（52.67）	

この結果に基づいて，以下４つの下位尺度得点を算出した。これらの下位尺度のα係数は.749～.828のレンジであり，十分な信頼性を有していると判断した。

(3) 父親の成長発達を測定する質問紙

各項目に４～１点を与え，主因子解による因子分析を施行した。固有値1.5以上の６因子を抽出し，これに*Varimax*回転を施した。１つの因子にのみ.40以上の負荷を有することを条件に項目の選択を行った。その結果を整理したものを表４に示す。第１因子は「一人一人がかけがえのない存在だと思うようになった」，「弱い立場の人に思いやりを持つようになった」，「いろいろな人に支えられていると感じるようになった」，「どのような人に

表 4　家事や子育てによる父親の成長発達を測定する項目の因子分析の結果の概要

項　　目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	共通性	α
19. 一人一人がかけがいのない存在だと思うようになった。	.690	.223	.150	.228	.125	.272	.690	.932
21. 弱い立場の人に思いやりを持つようになった。	.657	.251	.147	.147	.141	.286	.640	
24. いろいろな人に支えられていると感じるようになった。	.611	.188	.177	.318	.111	.249	.615	
23. どのような人にも、その人なりの良さがあると感じるようなった。	.596	.220	.173	.329	−.026	.303	.634	
22. 努力することの大切さがわかるようになった。	.591	.268	.184	.258	.211	.258	.633	
18. 児童福祉や教育問題に関心が増した。	.587	.270	.088	.042	.260	.195	.533	
33. 生きている張りが増した。	.585	.233	.303	.196	.031	.023	.528	
38. 子ども好きになった。	.528	.198	.300	.295	.103	.204	.537	
36. 子どもへの関心が強くなった。	.514	.090	.365	.181	.027	−.020	.439	
20. 日本の政治について関心が増した。	.505	.267	.036	.205	.356	.147	.518	
28. 目上の人をうやまうことは大切だと思うようになった。	.492	.225	.364	.362	.161	.263	.651	
39. 目先のことより、将来のことを考えて行動するようになった。	.440	.175	.287	.250	.267	.307	.535	
5．度胸がついた。	.200	.676	.135	.348	.163	.126	.679	.904
1．かどがとれて丸くなった。	.269	.653	.275	.077	.137	.193	.636	
2．考え方が柔軟になった。	.271	.650	.235	.153	.150	.125	.613	
3．他人に対して寛大になった。	.237	.644	.186	.070	.226	.223	.611	
4．精神的にタフになった。	.213	.620	.161	.094	.010	−.001	.465	
6．小さなことにくよくよしなくなった。	.167	.614	.134	.261	.219	.076	.545	
7．いろいろな角度から物事を見るようになった。	.338	.604	.230	.136	.217	.144	.618	
40. 一人前になった気がした。	.095	.289	.677	.110	.164	.028	.591	.840
44. 自分の健康に気をつけるようになった。	.244	.164	.622	.114	.151	.078	.515	
42. より大人になったと感じる。	.184	.296	.590	.232	.227	.253	.639	
37. より計画的になった。	.289	.095	.529	.196	.182	.133	.462	
49. 妥協しなくなった。	.209	.133	.217	.668	.161	.028	.581	.809
47. 物事に積極的になった。	.399	.172	.180	.632	.219	.159	.694	
45. 多少、他人との摩擦があっても自分の考えは通すようになった。	.237	.352	.035	.491	.139	.137	.460	
27. 常識やしきたりを考えるようになった。	.377	.223	.219	.422	.292	.321	.606	
30. 人間の力をこえたものがあることを信じるようになった。	.156	.185	.167	.153	.655	.041	.516	.700
26. 運やめぐり合わせを考えるようになった。	−.004	.193	.278	.356	.539	.242	.590	
31. 信仰や宗教が身近になった。	.154	.043	.180	−.025	.532	.039	.343	
12. 自分勝手な行動をしなくなった。	.343	.274	.321	.008	.123	.570	.311	.731
14. 倹約するようになった。	.203	.002	.223	.119	.106	.564	.434	
9．自分の欲しいものなどが我慢できるようになった。	.209	.171	.039	.100	.014	.535	.370	
寄　与　率（%）	15.68	12.21	8.55	7.72	5.91	5.86	累積寄与率（55.93）	

も，その人なりの良さがあると感じるようになった」などの項目の負荷が高く「視野の広がり」，第2因子は「度胸がついた」，「かどがとれて丸くなった」，「考え方が柔軟になった」，「他人に対して柔軟になった」などの項目の負荷が高く「柔軟さとたくましさ」，第3因子は「一人前になった気がした」，「自分の健康に気をつけるようになった」，「より大人になったと感じる」などの項目の負荷が高く「自己の存在感」，第4因子は「妥協しなくなった」，「物事に積極的になった」，「多少，他人との摩擦があっても自分の考えは通すようになった」などの項目の負荷が高く「積極性」，第5因子は「自分の力をこえたものがあることを信じるようになった」，「運やめぐり合わせを考えるようになった」，「信仰や宗教が身近になった」という項目の負荷が高く「自己の力の限界の認識」，第6因子は「自分勝手な行動をしなくなった」，「倹約するようになった」，「自分の欲しいものなどが我慢できるようになった」という項目の負荷が高く「自己統制力」とそれぞれ命名した。

以下，この6つの下位尺度得点を算出した。なお，これらの下位尺度のα係数は.700～.932の数値を示しており，信頼性は十分と判断した。

2．父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスとの関連

父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスの下位尺度得点間のピアソンの積率相関を算出し表5に示した。

表5　父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスとの関係

母親のストレス／父親の家庭での協力	心的疲労感	集中力の欠如	孤立感	自己閉塞感
子ども・妻とのコミュニケーション	−.132	−.163＊	−.173＊	−.187＊
家事への援助	.103	−.033	.031	−.176＊

＊p〈.05

それによると，父親の家庭での協力の「子ども・妻とのコミュニケーション」と母親の精神的ストレスの「集中力の欠如」「孤立感」「自己閉塞感」との間，また，父親の家庭での協力の「家事への援助」と母親の精神的ストレスの「自己閉塞感」との間にそれぞれ負の有意な相関が得られた。つまり，父親が，家庭において子どもや妻とのコミュニケーションをとろうとするほど，また，家事への援助が高いほど母親の精神的ストレスが低いという結果が得られた。

3．父親の家庭での協力及び母親の精神的ストレスによる子どもの社会性の発達の差異

次に，父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスの各下位尺度得点の平均を基準にして4群を設定し，S－M社会生活能力検査の6つの下位領域（身辺自立：SH，移動：L，作業：O，意志交換：C，集団参加：S，自己統制：SD）ならびに全体の社会生活指数（SQ）の差異を分散分析により検討した。有意差がみられたものについては*Tukey*法による多重比較を行った。なお，このS-M社会生活能力検査の得点化については，所定のマニュアルに基づいて行った。

父親の家庭での協力の「子ども・妻とのコミュニケーション」の下位尺度に関する結果を表6にまとめた。

それによると，母親の精神的ストレスの「集中力の欠如」の下位尺度との組み合わせでは，「作業」で有意差が得られた。多重比較の結果，「父親の子ども•妻とのコミュニケーション高×母親の集中力の欠如低」群や「父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の集中力の欠如高」群が「父親の子ども•妻とのコミュニケーション高×母親の集中力の欠如高」群よりも有意に高い値を示した。

母親の「孤立感」との組み合わせでは，「身辺自立」，「集団参加」で有意差が認められた。多重比較の結果，これらのいずれにおいても，「父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の孤立感低」群が「父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の孤立感高」群よりも数値は有意に高かった。

また，父親の協力の「家事への援助」の下位尺度については表7にまとめた。しかし，ここでは，いずれの組み合わせにおいても有意差は見られなかった。

表6　父親の家庭での協力（子ども・妻とのコミュニケーション）と母親の精神的ストレスによる4群の子どもの社会性の発達の差異

各群 ＼ 社会性	身辺自立 (SH)	移動 (L)	作業 (O)	意志交換 (C)	集団参加 (S)	自己統制 (SD)	社会生活指数 (SQ)
＜母親の心的疲労感＞							
父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の心的疲労感高 (40組)	70.38 (18.81)	54.88 (15.68)	65.25 (15.33)	65.55 (14.00)	68.68 (17.79)	71.53 (21.33)	110.15 (19.39)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の心的疲労感低 (53組)	71.42 (14.91)	58.42 (13.05)	69.13 (13.61)	70.43 (13.33)	70.32 (15.39)	72.21 (20.12)	110.17 (14.03)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の心的疲労感高 (31組)	72.19 (16.30)	58.90 (15.44)	72.10 (16.48)	69.03 (15.08)	71.19 (17.61)	70.65 (18.13)	110.10 (13.65)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の心的疲労感低 (29組)	73.28 (17.80)	58.00 (15.13)	69.76 (17.45)	73.00 (17.40)	68.69 (14.17)	72.38 (21.54)	109.21 (13.76)
F 値	.18	.60	1.22	1.59	.20	.05	.03
＜母親の集中力の欠如＞							
父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の集中力の欠如高 (37組)	66.24 (15.52)	53.95 (13.96)	61.68 (10.89) *	64.16 (13.36)	65.68 (14.73)	67.97 (15.84)	104.97 (16.44)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の集中力の欠如低 (56組)	74.09 (16.70)	58.84 (14.26)	71.29 (15.26) *	71.09 (13.44)	72.21 (17.03)	74.52 (22.89)	113.59 (15.67)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の集中力の欠如高 (30組)	74.50 (15.88)	59.33 (12.90)	72.17 (16.49)	71.63 (15.20)	73.33 (16.03)	73.23 (19.57)	109.67 (14.83)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の集中力の欠如低 (30組)	70.93 (17.97)	57.60 (17.33)	69.77 (17.40)	70.27 (17.42)	66.63 (15.41)	69.737 (20.00)	109.67 (12.50)
F 値	2.04	1.05	3.81 *	2.10	2.13 +	.94	2.42 +
＜母親の孤立感＞							
父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の孤立感高 (28組)	63.32 (13.36) *	51.93 (11.77)	62.04 (12.15)	63.07 (14.14)	62.18 (12.42) *	63.14 (16.13)	106.61 (15.43)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の孤立感低 (65組)	74.26	59.03 (14.79)	69.80 (14.78)	70.60 (13.06)	72.82	75.69 (21.17)	111.69 (16.75)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の孤立感高 (29組)	71.41 (16.73)	56.45 (13.83)	71.07 (16.84)	71.14 (16.75)	70.90 (18.02)	71.59 (18.77)	110.86 (12.77)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の孤立感低 (31組)	73.94 (17.26)	60.35 (16.32)	70.87 (17.14)	70.77 (15.99)	69.13 (13.99)	71.39 (20.84)	108.55 (14.44)
F 値	3.18 *	2.09	2.33 +	2.12 +	3.00 *	2.62 +	.84
＜母親の自己閉塞感＞							
父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の自己閉塞感低 (41組)	71.85 (17.02)	57.71 (14.51)	68.71 (15.69)	69.10 (14.10)	72.37 (18.42)	75.22 (24.19)	114.61 (16.03)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の自己閉塞感高 (81組)	70.63 (16.02)	56.20 (14.33)	67.69 (13.77)	68.04 (14.62)	68.54 (15.06)	69.49 (17.74)	107.68 (15.85)
父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の自己閉塞感低 (31組)	74.06 (17.35)	60.68 (15.38)	72.00 (19.07)	73.16 (15.86)	69.48 (15.93)	73.03 (20.13)	109.81 (11.70)
F 値	.48	1.06	.87	1.36	.76	1.18	2.84 +

上段の数字は平均値。（　）内の数字は標準偏差。

$*p<.05$　$+p<.10$

表7　父親の家庭での協力（家事への援助）と母親の精神的ストレスによる4群の子どもの社会性の発達の差異

各　群 ＼ 社会性		身辺自立 (SH)	移動 (L)	作業 (O)	意志交換 (C)	集団参加 (S)	自己統制 (SD)	社会生活指数 (SQ)
＜母親の心的疲労感＞								
父親の家事への援助高× 母親の心的疲労感高	(36組)	72.31 (19.62)	55.06 (14.81)	67.67 (18.41)	66.58 (15.44)	69.50 (16.86)	72.22 (20.05)	107.97 (17.09)
父親の家事への援助高× 母親の心的疲労感低	(33組)	67.36 (13.00)	55.36 (10.57)	65.48 (11.85)	67.64 (11.30)	65.88 (10.70)	67.09 (15.99)	108.88 (12.71)
父親の家事への援助低× 母親の心的疲労感高	(35組)	70.00 (15.58)	58.26 (16.42)	68.83 (13.56)	67.57 (13.63)	70.06 (18.62)	70.03 (19.89)	112.34 (16.88)
父親の家事への援助低× 母親の心的疲労感低	(49組)	75.24 (16.99)	60.22 (15.30)	71.96 (16.36)	73.84 (16.45)	72.35 (16.77)	75.76 (22.54)	110.47 (14.67)
F 値		1.64	1.18	1.26	2.30＋	1.06	1.33	.55
＜母親の集中力の欠如＞								
父親の家事への援助高× 母親の集中力の欠如高	(30組)	70.43 (16.64)	55.50 (12.71)	64.93 (16.00)	65.73 (14.69)	67.83 (13.73)	70.33 (13.98)	105.63 (15.97)
父親の家事への援助高× 母親の集中力の欠如低	(39組)	69.56 (17.22)	54.97 (13.14)	67.92 (15.27)	68.13 (12.66)	67.72 (14.85)	69.33 (21.17)	110.54 (14.15)
父親の家事への援助低× 母親の集中力の欠如高	(37組)	69.54 (15.87)	57.05 (14.52)	67.54 (13.38)	68.95 (14.55)	70.14 (17.23)	70.32 (20.34)	108.24 (15.78)
父親の家事への援助低× 母親の集中力の欠如低	(47組)	75.83 (16.67)	61.26 (16.50)	73.11 (16.29)	73.02 (16.25)	72.38 (17.82)	75.77 (22.34)	113.62 (15.13)
F 値		1.45	1.65	2.00	1.69	.76	.92	1.89
＜母親の孤立感＞								
父親の家事への援助高× 母親の孤立感高	(27組)	65.93 (17.11)	51.78 (10.96)	65.63 (16.14)	64.41 (14.31)	64.59 (13.10)	66.85 (15.37)	107.70 (16.18)
父親の家事への援助高× 母親の孤立感低	(42組)	71.88 (16.60)	57.40 (13.62)	67.26 (15.31)	68.81 (12.88)	69.81 (14.77)	71.64 (19.87)	108.86 (14.46)
父親の家事への援助低× 母親の孤立感高	(30組)	67.90 (14.34)	56.43 (14.33)	67.53 (14.70)	69.67 (17.08)	68.43 (18.26)	67.97 (20.13)	109.73 (12.30)
父親の家事への援助低× 母親の孤立感低	(54組)	75.93 (17.09)	61.06 (16.32)	72.39 (15.40)	72.09 (14.75)	73.04 (22.34)	76.37 (21.89)	112.09 (17.16)
F 値		2.48＋	2.58＋	1.57	1.67	1.75	1.86	.61
＜母親の自己閉塞感＞								
父親の家事への援助高× 母親の自己閉塞感高	(29組)	68.17 (16.07)	52.86 (12.65)	65.34 (15.26)	65.078 (13.65)	65.62 (13.51)	67.10 (13.81)	104.28 (15.11)
父親の家事への援助高× 母親の自己閉塞感低	(40組)	71.23 (17.48)	56.90 (12.90)	67.55 (15.88)	68.55 (13.42)	69.33 (14.76)	71.70 (20.88)	111.40 (14.46)
父親の家事への援助低× 母親の自己閉塞感高	(52組)	72.00 (15.98)	58.06 (14.98)	69.00 (12.84)	69.69 (15.01)	70.17 (15.75)	70.83 (19.60)	109.58 (16.08)
父親の家事への援助低× 母親の自己閉塞感低	(32組)	74.78 (17.50)	61.59 (16.84)	73.34 (18.42)	73.72 (16.36)	73.38 (20.12)	77.50 (24.12)	113.97 (14.51)
F 値		.81	1.89	1.51	1.82	1.19	1.43	2.23＋

上段の数字は平均値。（　）内の数字は標準偏差。

＊$p<.05$　＋$p<.10$

4．父親の家庭での協力と父親自身の成長発達との関連

父親の家庭での協力と父親自身の成長発達の下位尺度間のピアソンの積率相関を算出し，これを表8に示した。これ

表8　父親の家庭での協力と自身の成長発達との関係

母親のストレス／父親の家庭での協力	視野の広がり	柔軟さとたくましさ	自己の存在感	積極性	自己の力の限界の認識	自己統制力
子ども・妻とのコミュニケーション	.164＊	.218＊＊	.210＊＊	.010	－.007	.126
家事への援助	.202＊	.258＊＊	.138＋	.199＊	.170＊	.273＊＊

＊＊p〈.01　＊p〈.05　＋p〈.10

によれば，父親の家庭での協力を構成する「家事への援助」の下位尺度は，「自己の存在感」を除く全ての下位尺度と有意な正の相関が認められた。また，父親の家庭での協力の「子ども・妻とのコミュニケーション」の下位尺度は，父親の成長発達の「視野の広がり」，「柔軟さとたくましさ」，「自己の存在感」の下位尺度と正の有意な相関が得られた。

考　察

本稿では父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスとの関連，及びそれらと子どもの社会性の発達との関連，さらに父親の家庭での協力と父親自身の成長発達との関連について検討を行った。順次，これらについて考察を加える。

1．父親の家庭での協力と母親の精神的ストレス

父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスとの関係については，父親の家庭での協力的関わりを構成する「子ども・妻とのコミュニケーション」が母親の精神的ストレスの「集中力の欠如」，「孤立感」，「自己閉塞感」と有意な負の相関を示しており，父親の子どもや妻とのコミュニケーションが母親の精神的ストレスと関係するという結果が得られた。これは，尾形・宮下（1999）の小学校低学年の児童を持つ父母を対象とした研究とほぼ同様の内容の結果である。生活習慣の獲得や社会性の発達は乳幼児期にその基礎が獲得される場合が多く，しかも親の関わりがかなりの影響を与えることになる。このような成長発達の途上にある子どもを育てることは，親にとって精神的にも肉体的にも多くの労力を要する。とくに，専業主婦家庭の場合，母親は子どもと一緒に過ごすことが多く，子どもと過ごすこと自体ストレスになりやすい。したがって，父親が子どもと関わることは，母親にとって子育てを共有することになり，ストレスの軽減のために重要なことと考えられる。子どもの幼稚園での生活についても，母親は考えたり悩んだりすることが多く，比較的ストレスのたまりやすい時期であろう。このような時期には，何よりも父親が子どもと一緒に遊んだりすることや母親と子育てについての悩みや，不安などを語り語り合うことが必要とされるのではないだろうか。

また，父親の協力的関わりを構成する「家事への援助」は，母親のストレスの「自己閉塞感」と有意な負の相関があることが示された。このような結果は，尾形・宮下（1999）では得られていないが，これは，幼児の子育て中の家庭では，母親にかかる肉体的負担を軽減するための父親の具体的な関わりが，母親の精神的ストレスを和らげるために重要であることを示唆していると考えられる。

以上のように，父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスとの関連は，父親の家庭での協力の中の「子ども・妻とのコミュニケーション」を中心に検証された。つまり，父親が子どもとのコミュニケーションをとりながら，しかも夫婦間で十分なコミュニケーションをとることが，母親の精神的ストレスの減少と関わりを持つことが明確にされた。この結果は，尾形・宮下（1999）と一致するとともに，原ら（1998）の，夫が子どもとの間に適切なコミュニケーションを形成することが妻の精神的負担を減少するための一要因となるという指摘を裏づけるものである。また，子育てにあたっている夫婦において，夫が妻に対して理解を持ち，妻も夫に対して好意を持つ場合に妻の育児ストレスが減少するという指摘（牧野・中西，1985；諏訪ら，1997）にもあるように，夫婦間のコミュニケーションに基づく相互理解が妻の精神的ストレスの軽減に重要な要因となることを裏づけるものと考えられる。

2．父親の家庭での協力及び母親の精神的ストレスによる子どもの社会性の発達

次に，父親の家庭での協力及び母親の精神的ストレスと子どもの社会性の発達との関連に関しては，父親の協力の「子ども・妻とのコミュニケーション」の下位尺度においてその差異が明らかになった。具体的には，「父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の集中力の欠如低」群や「父親の子ども・妻とのコミュニケーション低×母親の集中力の欠如高」群が「父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の集中力の欠如高」群よりも「作業」の数値が有意に高く，また，「父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の孤立感低」群が「父親の子ども・妻とのコミュニケーション高×母親の孤立感高」群よりも「身辺自立」，「集団参加」において有意に高い数値を示した。有意差が得られたものこそ少ないが，父親の協力の「子ども・妻とのコミュニケーション」の下位尺度得点が高く，かつ母親の精神的ストレスの「集中力の欠如」と「孤立感」の各下位尺度得点が低い場合に子どもの社会生活能力の得点が最も高いことが分かる。

これは，父親の家庭での協力が高く，母親の精神的なストレスが少ない家庭では，父親も母親も子どもと生き生きと関わる条件が整備され，それが子どもの発達に好影響を及ぼすためと考えられる。つまり，このような家庭では，父親，母親とも子どもへの関心が向き，子どもと意志疎通のある親子関係が形成されるなど，子育てのための基本的な家庭環境が整っているためと考えられる。このことは，母親が家庭において父親から援助を受け，受容されていると認知するほど母子関係が良好で，子どもの発達上好ましい環境になるという報告（Crockenberg, 1981）を支持するものと思われる。また，子育てについて夫婦間の一致度が高い場合に家庭環境が良好で，しかも子どもの社会適応も良好であり（Deal et al., 1989），さらには，夫婦間の関係が良好である場合，子どもは攻撃的な対処行動をあまり取らない（Hardy et al., 1993）といった，夫婦関係と子どもの社会適応に関する報告を支持する結果と考えられる。

なお，父親の家庭での協力の「子ども・妻とのコミュニケーション」と母親の精神的ストレスの「集中力の欠如」の組み合わせの場合，父親の協力が低く，かつ母親の精神的ストレスが高い群の方が，父親の協力が高く，かつ母親の精神的ストレスが高い群に比較して，「作業」領域での子どもの社会生活能力が高いという結果も見受けられた。これは，予想外の結果であり，今後さらなる研究が必要であろう。

また，父親の協力の「家事への援助」の下位尺度については，本研究では全く差が見られなかった。これは，今回の調査対象の多くが専業主婦家庭であり，父親は仕事，母親の家事や子育てといった役割分担が比較的できており，そのために父親の家事への援助は直接的に大きな影響力持つまでには到っていない可能性が考えられる。しかし，現実問題として，共働き家庭では母親に心身ともに負担が大きくかかる傾向があり，父親の家事への援助は必要であろう。この点も含めて専業主婦家庭と共働き家庭の比較をすることは興味深いことと思われる。

以上のように，有意差が得られたものこそ少ないが，父親の家庭での協力的関わりがあり，母親が精神的ストレスが少ない家庭において子どもの社会性の発達がより良好であることが示された。

尾形・宮下（1999）に比べて明確な結果が得られなかった理由としては，調査対象の子どもが幼児であることが考えられる。幼児期は発達的にまだ未成熟な段階であり，今回測定した社会生活能力検査の各内容も幼児期の子どもに十分に身についているとは言えない状況にあると考えられる。それに対し，児童期は家庭中心の生活から学校中心の生活へ変化し，自己の意志に基づいて行動したり，規律ある生活を求められるなど幼児期に比べある程度は社会性も身について行く段階と考えられ，そのためにある程度の結果が出て来ると考えられよう。これについては，発達的な観点から比較検討を加える必要があると考えられる。

3．父親の家庭での協力と父親自身の成長発達

父親の家事や子育てへの関わりが父親自身の成長発達と関連することについては「問題と目的」の部分で触れ，尾形・宮下（1999）でも検証されたが，本研究からもこれらを支持する結果が得られた。

本研究で取り上げた父親の家庭での協力と自身の成長発達との関係については，父親の家庭での協力の「家事への援助」の下位尺度が，自身の成長発達の6つの下位尺度の中の5つと有意な正の相関が得られ，また，家庭での協力の「子ども・妻とのコミュニケーション」が，成長発達の「視野の広がり」，「柔軟性とたくましさ」，「自己の存在感」とそれぞれ有意な正の相関を示した。つまり，家庭の中で展開される父親の家事や子育て等への具体的な関わりが自身の成長発達と大きく関係するという結果が得られた。特に，「家事への援助」は自身の成長発

達と幅広く関係を有しており，父親の母親への援助や関わりが自身の成長発達と関係していることが明らかにされた。家事は，母親が行うものという固定観念があるが，特に母親にとっては子育てと同時に，家庭内で抱える仕事の量が多いために肉体的・精神的負担の多い仕事の一つといえよう。したがって，このような仕事を父親が手伝うことにより，その仕事の大変さや重要性を再認識したり，母親に多くかかる負担を知る機会にもなっていると考えられる。また，「子ども・妻とのコミュニケーション」に関しては，母親の子育てを中心とした母親の抱える悩み，相談事，また，子どもの様子などを父親として具体的に知ることができると同時に，母親も父親のことを知る相互理解の機会にもなる。したがって，このようなコミュニケーショという関わりを通して母親やこどものことについてより深く理解すると同時に，そのことと関連づけて自己を改めて見直す機会にもなり，このことが自己の成長発達に影響を与える一因となっているものと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では，父親の家庭での協力と母親の精神的ストレスとの関連，及びそれらと子どもの社会性の発達との関連，父親の家庭での協力と自身の成長発達との関連について検討した。その結果，父親が子ども・妻とのコミュニケーションを中心として，母親との関わりを多く持つほど，母親の「集中力の欠如」，「孤立感」，「自己閉塞感」が少ないことが示された。また，一部ではあるが，父親が家庭で，子どもや妻とのコミュニケーションを多く持ち，かつ母親の精神的ストレスが低い場合に，子どもの社会性の発達が最も良いことが示された。さらに，家庭で協力的な関わりを持つ父親ほど，自身の成長発達が高いという結果が得られた。

以上のように，本研究では，ほぼ予想に沿う結果が見出されたが，今後の課題として次の2点を指摘しておきたい。本研究では専業主婦家庭を中心に調査を実施した。専業主婦家庭では母親が家庭中心，父親が仕事中心の生活を送っている場合が多く，夫婦それぞれの役割分担が比較的明確であり，夫婦相互の理解は家庭での語らいが中心になると考えられる。本研究でコミュニケーションを中心とした父親の関わりが母親の精神的ストレスの軽減に関連するという結果が得られたのは，この点が関係していると思われる。

しかし，共働き家庭では夫婦ともに働いており，母親の精神的ストレス軽減のためにコミュニケーションが基本的に重要な要素であることに変わりがないであろうが，それと同等か，あるいはそれ以上に，父親の家事への援助が母親の精神的ストレス軽減のために重要であると考えられる。本研究では，このような分析は行っていないが，専業主婦家庭と共働き家庭の比較を行うことは今後の重要な課題であろう。

また，本研究では，父親の家庭での協力を父親の認知の視点からとらえたが，母親の適応を考察する上では，父親の協力的な関わりを母親がどのように受け止めているかという視点から検討することも必要であろう。

謝　辞

本研究の実施に当たり，科学研究費補助金（基盤研究（C）（1），課題番号：09610105，研究代表者：宮下一博）の援助を受けた。また，調査の実施にあたり，多くのみなさまのご協力を頂いた。これらの方々に心より感謝申し上げます。

引用文献

Belsky, J. 1984　The determinants of parenting : A process model. *Child Development*, **55**, 83-96.

Belsky, J., & Isabella, R.A. 1988　Maternal, infant and social-contextual development of attachment security. In J. Belsky & T. Nezworski(Eds.), *Clinical implications of attachment* (pp.41-97). Hillsdale, NJ : Erbaum.

Bronstein, P., & Cowan, C.P.(Eds.). 1988　*Fatherhood today : Men's changing role in the family*. New York : Wiley.

Christensen, A., & Margolin, G. 1988　Conflict and alliance in distressed families. In R.A.Hinde &

J.Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationships within families : Mutual influences* (pp. 263-282). New York : Oxford University Press.

Clarke-Stewart,K.A. 1978 And daddy makes three: The father's impact on mother and young child. *Child Development*, **49**, 466-478.

Crockenberg, S.B. 1981 Infant irritability, mother responsiveness, and social support influences on the security of infant-mother attachment. *Child Development*, **52**, 857-865.

de Brock, A.J., & Vermust, A.A. 1991 Marital discord, parenting, and child disfunctioning. *The Society of Research in Child Development* 1991年大会発表要約集，225.

Deal, J. E., Halverson, C. F. Jr., & Wampler, K. S. 1989 Parental agreement on child-rearing orientations: Relations to parental, marital, and characteristics. *Child Development*, **60**, 1025-1034.

Engfer, A.1988 Interrelatedness of marriage and the mother-child relationship. In R.A.Hinde & J.Stevenson-Hinde(Eds.), *Relationships within families : Mutual influences* (pp. 104-118). New York : Oxford University Press.

藤森秀子・真栄城和美・八木下暁子・菅原ますみ 1998 家族関係と子どもの発達 (2) －家族関係と子どもの精神的健康について－ 日本心理学会第62回大会発表論文集，272.

Goldberg, W.A., & Easterbrooks, M.A. 1984 Role of marital quality in toddler development. *Developmental Psychology*, **20**, 504-514.

原 孝成・江崎明子・弦巻千文・石橋英子・田嶋朋子 1998 父親の育児態度が母親の満足度に及ぼす影響 日本発達心理学会第９回大会発表論文集，348.

Hardy, D.F., Power, T.G., & Jaedicke, S. 1993 Examining the relation of parenting to children's coping with everyday stress. *Child Development*, **64**, 1829-1841.

Hawkins, A.J., Christiansen, S.L., Sargent, K.P., & Hill, E.J. 1995 Rethinking father's involvement in child care : A developmental perspectives. In W. Marsiglio(Ed.), *Fatherhood*(pp.41-56). CA:Sage.

Heath, D.H., & Heath, H.E. 1991 *Fulfilling lives : Paths to maturity and success.* San Francisco : Jossey-Bass.

Howes, P., & Markman, H.J. 1989 Marital quality and child functioning: A longitudinal investigation. *Child Development*, **60**, 401-409.

Jackson, E.P., Dunham, R.E., & Kidwell, J.S. 1990 The effect of gender of family cohesion and adaptability on identity status. *Journal of Adolescent Research*, **5** (2), 161-174.

柏木恵子 1993 父親の発達心理学 －父性の現在とその周辺－ 川島書店

柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み 発達心理学研究，**5**，72-83.

Katz, L.F., & Gottman, J.N. 1993 Patterns of marital conflict predict children's internalizing and externalizing behaviors. *Developmental Psychology*, **29**, 940-950.

数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究，**7**，31-40.

越 良子・坪田雄二 1990 母親の育児不安と父親の育児協力との関連 広島大学教育学部紀要，**39**, 181-185.

Lamb, M.E. 1975 The relationships between infants and their mothers and fathers. Unpublised doctoral dissertation, Yale University.

Lindahl, K.M., Howes, P.W., & Markman,H.J. 1988 Exploring links between marital communication, parent-child interactions, and the development of empathy. Poster presented at the Meeting for the Association for Advancement of Behavior Therapy, New York.

牧野カツコ・中西雪夫 1985 乳幼児を持つ母親の育児不安：父親の生活および意識との関係 家庭教育研究所紀要，**6**，11-24.

牧野暢男・中原由里子　1990　子育てにともなう親の意識の形成と変容：意識調査　家庭教育研究所紀要，**12**, 11-19.

Minuchin, S. 1974　*Families & family therapy*. Cambridge: Harvard University Press.

Nakagawa, M.,Teti,D.M., & Lamb, M.E. 1992　An ecological study of child-mother attachments among Japanese sojourners in the United States. *Developmental Psychology*, **28**, 584-592.

尾形和男　1993　父親についての研究（Ⅵ）　－共働き家庭における母親の育児に対する父親の協力と子どもの精神発達－ 国際学院埼玉短期大学研究紀要，**14**, 23-32.

尾形和男　1995　父親の育児と幼児の社会生活能力　－共働き家庭と専業主婦家庭の比較－　教育心理学研究，**43**, 335-342.

尾形和男・宮下一博　1999　父親の協力的関わりと母親のストレス、子どもの社会性発達および父親の成長　家族心理学研究，**12**, 87-102.

岡本祐子　1996　育児における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究　日本家政学会誌，**47**, 849-860.

大日向雅美　1988　母性の研究－その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証　川島書店

Robinson, B.W., & Barret, R.L. 1986　*The developing father-emerging roles in contemporary society*. New York : Guilford Press.

Rutter, M. 1988　Functions and consequences of relationships : Some psychopathological considerations. In R. A.Hinde & J.Stevenson-Hinde(Eds.), *Relationships within families : Mutual influences* (pp. 332-353). New York : Oxford University Press.

清水秀美・今栄国晴　1981　STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版（大学生用）の作成　教育心理学研究，**29**, 348-353.

新谷和代 1999 夫婦の信頼関係と育児ストレスの関連について　日本発達心理学会第10回大会発論文集，355.

新谷由里子・村松幹子・牧野暢男　1993　親の変化とその規定因に関する一研究　家庭教育研究所紀要，**15**, 129-140.

菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・菅原健介　1998　夫婦関係と子どもの発達（４）－夫婦関係と子どもの抑うつ傾向との関連－ 日本発達心理学会第９回大会発表論文集，361.

諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる・田丸尚美・角本典子　1997　埼玉県における子育ての実態と母親の育児ストレス　－１歳児を保育園に預けて働く母親の場合－　鳥取大学教育学部研究紀要報告，**39**, 83-129.

高橋直美　1998　両親間および親子間の関係と子どもの精神的健康との関連について　家族心理学研究，**12**, 109-123.

田中祐子　1995　単身赴任による家族分離が勤労者の心理的ストレスに及ぼす影響　－ストレス反応を中心として－　心理学研究，**65**, 428-436.

渡辺さちや　1989　家族機能と自我同一性地位の関わり－青年期の自我の自立をめぐって－ 家族心理学研究，**3**, 85-95.

Weiraub, M., & Wolf, B.M. 1983　Effects of stress and social supports on mother-child interactions in single- and two-parent families. *Child Development*, **54**, 1297-1311.

Willemesen, E.W., & Waterman, K.K. 1991　Ego identity status and family environment : A correlational study. *Psychological Reports*, **69**, 1203-1212.

山口典子　1993　子どもの相互作用が父親の精神的成長に及ぼす影響　白百合女子大学修士論文（未公刊）